

近代京都の着物図案に関する研究  
**A Study of the Kimono Designs in Kyoto during the Meiji, Taisho and  
early Showa periods**

山本 真紗子<sup>\*1+</sup>, 並木 誠士<sup>\*2+</sup>, 青木 美保子<sup>\*3+</sup>, 山田 由希代<sup>\*4+</sup>, 加茂 瑞穂<sup>\*1+</sup>  
Masako Yamamoto<sup>\*1+</sup>, Seishi Namiki<sup>\*2+</sup>, Mihoko Aoki<sup>\*3+</sup>, Yukiyo Yamada,<sup>\*4+</sup> and Mizuho Kamo<sup>\*1+</sup>

\*1 立命館大学 衣笠総合研究機構 京都市北区等持院北町 56-1  
Kinugasa Research Organization, Ritsumeikan University,  
56-1 Toji-in Kitamachi Tojiin Kita-ku, Kyoto, Japan

\*2 京都工芸繊維大学 大学院 工芸科学研究科デザイン学部門  
Kyoto Institute of Technology, Faculty of Design Science, Department of Design,

\*3 京都女子大学 家政学部  
Kyoto Women's University, Faculty of Home Economics,

\*4 京都府立堂本印象美術館,  
Kyoto Prefectural Insho-Domoto Museum of Fine Arts,  
+服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化学園大学  
Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture  
Bunka Fashion Research Institute, Bunka Gakuen University

Abstract : This study aims to survey materials and information related to kimono, kimono designs, and textiles produced in Kyoto during the modern period. The results of the survey are to be sorted for further research. There are four research approaches of this study.

1. In 2010, we conducted a general survey of public and private collections of kimono and kimono designs in Kyoto. According to the survey, we created a list of collections which holds materials related to this research, and interviewed curators of the collections.
2. We made a list of all the article headings in the newspaper *Senshoku Hinode Shinbun* (Dyeing Industry News Paper) published between April 1932 and March 1933.
3. In the modern period, department stores played important roles for introducing new designs and creating new fashion trends. We chose Takashimaya Hyakusenkai (seasonal event to introduce kimono with new designs at Takashimaya Department Store) to research how department stores were involved in the kimono culture. We interviewed former employees of the Design Office of the Takashimaya Department Store.
4. We conducted a research of kimono worn by Oharame (women of Ohara). The results are put into an exhibition "Oharame" at Kyoto Institute of Technology Museum and Archives (28 January – 23

---

\*1) mayama1212@gmail.com

February, 2013)

All four approaches have shed light on situations surrounding historical materials related to kimono culture in Kyoto. In addition, a number of historically important materials were found. This study, however, needs further research in order to construct a comprehensive view of kimono culture and the dyeing industry of modern Kyoto. By using the results of this study, we will continue working on this topic.

要旨:本研究では京都市内の近代染織、とりわけ着物・着物図案に関する資料の残存状況の調査と、そこで収集した資料の活用の方法を探る。主な活動は下記の通りである。

(1)京都市内の残存する資料の所在と現状把握のためのアンケート調査を 2010 年度実施した。その回答結果をもとに、各所蔵機関への訪問・聞き取り調査を実施した。

(2)昭和初期の京都市内の染織業界の動向を知るため、その基礎資料として『染織日出新聞』の調査を開始した。書誌情報(発刊日ほか)の調査を行い、1932 年 4 月から 1933 年 3 月までの記事の目録化をおこなった。

(3)着物図案の流行をリードした百貨店意匠部の活動を把握するため、高島屋・百選会に関する聞き取り調査(座談会)を実施した。

(4)大原女の衣装に関する聞き取り調査をおこなった。また、その成果報告として展覧会を実施した。

本共同研究ではこれまで知られていない染織資料の収集と分析はもちろんのこと、アンケート、聞き取り調査や訪問調査を通じ、資料のおかれている現状を把握することができた。また、京都を中心とした染織産業の新たな側面や興味深い資料を目にすることができた。しかし、3 年間では近代京都を中心とした染織業全体を網羅できたとは言い難い。今後は共同研究を踏まえ、さらに研究を発展させて京都を中心とした染織業や服飾文化の様相を明らかにしていきたい。

## 配当決定額

平成 22 年度	475,000 円
平成 23 年度	445,000 円
平成 24 年度	850,000 円
合計	1,770,000 円

## 研究の目的

京都は、西陣織・友禅染に代表される、我が国の染織産業の中心地のひとつである。とくに近代以降は、ジャガード織機や化学染料をはじめとする西欧からの技術移転や、型友禅などの新技術・技法の開発、工業化の進展による生産量の増加などを背景に、染織産業はおおいに発展し、名実ともに京都の産業の柱であった。着物が“流行”の中心となり、季節ごとにあらたな図案や柄が発表されるようになったのもこのころである。

しかし、戦後人々の洋装が主流となり、とくにバブル期以降の和装用品需要の減少が顕著になると、京

都の染織産業、とりわけ着物関連産業が低迷していく。現在も、不況の影響なども手伝い、状況は依然厳しいままである。このような状況を背景に、近代の染織産業を支えた企業が廃業を余儀なくされている。同時に、後継者不足や IT 化などの業態の変化もあって、資料の散逸や機械・用具の廃棄が進み、知識や技術の伝承も難しくなってきたといえる。

一方、近代染織や着物に関する研究に関してはどうであろうか。近代の染織、染織産業や着物に関する研究を行う場合、さまざまなアプローチが考えられる。そのなかでも、とくに近代を対象とした研究に特有の事情をあげるとすれば、近代の染織、染織産業、着物、着物産業にかかわる資料が膨大に存在するという点であろう。これは何も染織・着物関連の研究のみにおこる現象ではないが、大量の資料をどのように収集し、またどうやって取り扱うのが問題となるのは事実である。

とりわけ、京都では、染織産業や着物生産が盛んであることから、残存する資料も多く、また近代の染織産業にかかわる機関や人物も多いということは容易に想像がつく。しかし、あまりにも多くの資料が存在し、関係者も多数いることから、京都に残る資料群の概要や、各資料群の位置づけが把握されないままであった。個別の資料や人物に対する研究はそれぞれに試みられ、また実際に成果が発表されているものの、全体を俯瞰するにはまだまだ不十分であるといわざるを得ないのである。

本研究は、こうした状況を少しでも解消すべく計画された。京都市内の研究機関や業界・関係者が個別に所蔵し、現在孤立した状況にある各資料群の所蔵状況と性質を明確にする作業の第一段階となることを意図している。本研究では、未公開資料の紹介などを含め、各資料群の性質を明らかにするための作業をおこなった。京都市内の資料の整理・体系化をめざし、近代染織の展開の重要地である京都市域の研究をすすめる上での基礎的な資料となるべく、いくつかの試みをしている。本報告を用いることで、国内外の研究者の研究資料へのアクセスが容易になり、他分野の研究者も含め資料の利活用がすすむことを期待したい。また業界内の変化や経年により廃棄・消失の危機にある近代染織資料と生の証言を蒐集し、後代に残す役割も果たしたいと考えている。

## 研究の方法

本研究では京都市内の近代染織、とりわけ着物・着物図案資料の残存状況の調査と、その資料の活用の方法を探るべく、2010 年度から 2012 年度にかけて下記の活動を進めた。

- (1) 京都市内の残存する資料の所在と現状把握のためのアンケート調査を実施した。また、回答結果をもとに、一部所蔵機関への訪問・聞き取り調査を実施した。
- (2) 昭和初期の京都市内の染織業界の動向を知るため、基礎資料として『染織日出新聞』の調査を開始した。一部は記事の目録化をおこなった。
- (3) 着物図案の流行をリードした百貨店意匠部の活動を把握するため、高島屋・百選会に関する聞き取り調査(座談会)を実施した。

(4)大原女の衣装に関する聞き取り調査をおこなった。また、その成果報告として展覧会を実施した。

最終年度である2012年度には、上記の活動と調査の結果を独自報告書としてまとめる。

## 研究の実施計画

[22年度]

(1)京都市内の近代染織に関する資料を所蔵する機関・個人に対してアンケート調査をおこなう。30件の資料を所蔵する機関・個人に対し、①収蔵する資料の概要②資料の整理や管理の状況(目録・データベースの作成状況)③資料の公開状況(一般・研究者向け、公開・非公開など)④資料調査の受け入れの可否⑤アンケート回答の公開の可否の5点についてのアンケート調査票を郵送し、調査の受け入れが可能との回答があった機関・個人に対しては、後日訪問調査をおこなう。

(2)高島屋百選会に関する聞き取り調査をおこなう。高島屋の新図案作成をになった百選会の活動について、百選会専属デザイナーと百選会担当社員に対するインタビューをおこなう。

[23年度]

(1)22年度に実施したアンケート調査をもとに、京都市内を中心とした近代染織関連資料、とりわけ着物図案資料の所蔵機関への訪問・聞き取り調査を実施する。23年4月現在で回答のあった16件の調査候補機関を訪問し、(A)所蔵資料・コレクションの概要(B)整理・保管の状況(C)研究者や一般への資料公開の状況、の3点を中心に聞き取り調査をおこない、とくに研究資料としての活用のカギとなる目録化やデータベース作成の現状についてまとめていきたい。本調査の結果は、所蔵者・所蔵機関の許可を得られた内容は共同研究拠点の成果報告書にて報告・公開するほか、より広範な利用を得るためのフォーマット(書籍化・ウェブ上での公開等)を検討し、情報の公開と共有化を行っていきたいと考えている。聞き取り調査のための交通費、録音機器(ICレコーダ及びマイク)・資料撮影機器(デジタルカメラ)購入費等を研究費より支出する。

(2)昭和7年～15年に京都日出新聞社より刊行された『染織日出新聞』の調査をおこなう。調査に当たっては、国会図書館所蔵本(マイクロ資料)を複写し底本として使用する。国会図書館本と京都市右京区中央図書館本や京都新聞社本などの照合などを踏まえた書誌情報の作成をおこなう。また記事や見出しを抜き出し、目録データを作成予定である。底本となる国会図書館本の複写費・簡易製本費を研究費より支出する。

[24年度]

(1)22年度に実施したアンケート調査をもとに、京都市内を中心とした近代染織関連資料、とりわけ着物

図案資料の所蔵機関への訪問・聞き取り調査を実施する。本共同研究は、京都市内に残存する近代染織関連資料の現状の把握と、その情報の整理を出発点としており、本調査は本共同研究の基盤をなすとともに、調査結果の公表により今後の近代染織および着物研究を実施する研究者の利便性を向上させることを目的としている。

本調査の関連調査として、資料所蔵機関との共同調査(NPO 法人京都古布保存会との大原女衣装に関する調査)を実施する。

(2)昭和初期に京都日出新聞社より刊行された染織日出新聞の調査をおこなう。染織日出新聞は、当該期の京都周辺の染織業界の動向を知るうえで重要な資料であるものの、所蔵機関が限定されていることなどから、その存在も含めてほとんど知られてこなかった。平成23年度には、創刊時(昭和7年4月)～昭和8年3月までの約1年間の見出しのリストを作成しており、今年度はその作業の継続と、内容検討を行う。

上記2項目の調査を実施し、本年度における調査内容の公開を目指す。(1)京都市内の資料所蔵機関およびその所蔵品(2)染織日出新聞記事見出し一覧を、共同研究拠点での活動報告書に加え、調査報告書として発行し、所蔵機関相互や研究者・研究機関での資料利用や研究促進のツールとして使用されることを目指す。

## 研究の成果

本共同研究では前述の通り、(1)近代染織関連資料の所蔵機関・個人に対するアンケート調査(2)アンケート調査を元にした訪問調査(3)高島屋百選会の活動に関するインタビュー調査(4)大原女衣装に関する調査の4つの活動を中心に調査を進めてきた。調査の詳細な内容は、独自報告書として本報告書とは別に発刊した。

アンケート調査の結果を元に、可能な限り多数の資料所蔵機関、所蔵者の資料を調査したかったが、今回はアンケート・訪問調査をあわせても一部にとどまらざるをえなかった。しかし、各所蔵機関・所蔵者の来歴や性格を反映したユニークな資料の存在を知り、いくつかの機関では実際に興味深い資料を閲覧することができた。また、それぞれの所蔵機関では所蔵資料のデータベース化などが進められているものの、その存在を知られているものは少ないと言わざるを得ない。

本研究のアンケートや聞き取り調査を通じて、染織関連資料のアクセスに対する一助となるよう所蔵機関の基礎的情報を、独自報告書内に一覧で掲載させていただいた。

昭和初期の京都の染織産業・着物産業の状況を知るために、文献資料調査として『染織日出新聞』の調査をおこなった。記事索引を約一年間分作成し、独自報告書の後半に掲載している。記事の中には、染織の新たな技法や新図案の紹介、海外の商況の報告といった業界の動向がうかがえる記事の他、京都外の産地の状況、昭和初期のモダンな感覚を反映した広告など、様々なトピックスがちりばめられている。独自報告書により一部ではあるが、その内容を御紹介できれば幸いである。

百選会に関する聞き取り調査と大原女衣装に関する聞き取り調査は、いずれも実際に活動に関わられている(た)方々からの貴重な証言を得ることができた。独自報告書内でも十分にその内容を紹介できたとは言い難いが、一部は雑誌記事や展覧会という形で公開することができた。

本共同研究でおこなった調査は、いずれも研究の端緒となるような基礎的なものにすぎない。調査をすすめるに従い、より多くの課題や新たな関心が生れてきた。

たとえば、“染織祭”である。本文でも紹介しているが、これは戦前の一時期に染織に携わる人々によって取り行われていた祭礼である。染織を司る神を奉る祭祀と、各時代の衣装を身につけた女性たちによる女性時代衣装行列がおこなわれていたとの記録が残されている。今日のように時代祭に女性の行列がなかった当時、染織業界の技をあつめた華やかな衣装を身につけた女性たちのパレードは、春の京都の話題を集めたようである。

『染織日出新聞』は、染織祭の実施された期間(1931年[昭和6]～1940年[昭和15])と同時期に発刊されていたため、染織祭開催当時の様子が報道されていることが記事索引作成作業を通してわかった。また今回の訪問調査で訪問した京都染織文化協会には、染織祭の衣装が保管されている。現在、京都染織文化協会では、協会所蔵の染織祭関連の資料の調査が進められているとうかがった。“染織祭”という題材を分析することで、染織業界の活況や、短期間で豪華な衣装をそろえられたという業者の意気込みや職人の技量といった、昭和初期の京都の染織産業のさまざまな側面をあきらかにすることが出来る。これまでは個々に調査をすすめられてきたが、それぞれの調査の成果を持ち寄ることで、より多くの成果を得ることができるだろう。今回の調査が、ばらばらに行われている研究を結び付けるきっかけとなることを願う。

以上のように、本共同研究ではこれまで知られていない染織資料の収集と分析はもちろんのこと、アンケート、聞き取り調査や訪問調査を通じ、京都を中心とした染織産業の新たな側面や興味深い資料を目にすることができた。このような聞き取りやアンケートなどの基礎的調査や共同研究の機会は頻繁に得られるものではなく、非常に意義のある共同研究となった。しかし、先述したように3年間では近代京都を中心とした染織業全体を網羅できたとは言い難い。今後は共同研究を踏まえ、さらに研究を発展させて京都を中心とした染織業や服飾文化の様相を明らかにしていきたいと考える次第である。

最後に、調査にご協力いただいた機関・資料所蔵者・関係者の皆様、共同研究の機会を与えてくださった文化学園大学・文化ファッション研究機構に記して御礼申し上げます。

## 主な発表論文等

[雑誌論文]

青木美保子「機械捺染」, *繊維と工業(繊維学会誌)*, Vol.66.No.10, pp.22～27, (2010)

加茂瑞穂「財団法人京染会蔵友禅協会図案について—明治期の友禅図案」*服飾文化学会学会誌*, Vol.12 No. 1, pp.59～70, (2012)

加茂瑞穂「祐信の服飾意匠とその特徴—風俗絵本と小袖雛形本を手がかりに」*西川祐信研究会論文集*

(仮)(2013年3月末日刊行予定)

山本真紗子「北村鈴菜と三越百貨店大阪支店美術部の初期の活動」, *Core Ethics*, vol.7, pp.323～334, (2011)

山本真紗子「百貨店の図案創出における日本美術研究成果の影響—中井宗太郎と高島屋百選会の事例から—」*Core Ethics*, vol.8, pp.411～421, (2012)

山本真紗子, 「戦前期の高島屋百選会の活動」*Core Ethics*, vol.9, (2013年3月末日発刊予定)

[図録]

青木美保子「京都工芸繊維大学所蔵の文字意匠の着尺図案」キモノの文字文様に託された世界(武庫川女子大学資料館平成22年度秋期展覧会 生活文化玉手箱シリーズ1 図録1) , pp.58～59, (2010)

青木美保子「大原女の服装美」第一回大原女衣装調査報告, NPO法人京都古布保存会, pp.4～6, (2012)

山本真紗子「描かれた大原女—時代による変化」第一回大原女衣装調査報告, NPO法人京都古布保存会, pp.14～16, (2012)

[国際会議発表]

Mizuho Kamo: Transformations of the ‘Whose sleeves?’ (Tagasode) Motif in Various Art Forms : An Interdisciplinary Study of Art, Literature and Design, IAJS(国際日本学会), 2011/10/29

[口頭発表]

青木美保子「大原女の服装美」京都府地域力再生助成金対象事業・大原女衣装保存プロジェクト調査結果報告会, 2012/3/17

山本真紗子「描かれた大原女—時代による変化」京都府地域力再生助成金対象事業・大原女衣装保存プロジェクト調査結果報告会, 2012/3/17

[展覧会]

企画展「大原女—柴売りから観光資源へ—」=企画: 京都工芸繊維大学文化遺産教育研究センター、NPO法人京都古布保存会「大原女研究」プロジェクト、文化学園大学文化ファッション研究機構「近代京都の着物図案に関する研究」プロジェクト、会場: 京都工芸繊維大学美術工芸資料館、主催: 京都工芸繊維大学文化遺産教育研究センター、京都工芸繊維大学美術工芸資料館、NPO法人京都古布保存会、協力: 文化学園大学文化ファッション研究機構、京都・大学ミュージアム連携、大原観光保勝協会、会期: 2013年1月28日(月)～2月23日(土)



展覧会会場風景



ギャラリートーク風景

[雑誌記事]

「きものにおける芸術と意匠創業 180 周年記念企画 近代きものの流行を作ってきた『百選会』OB・OG が語る、高島屋「大切なのは、一つ突き抜けるための努力」*T-Times*・2011 年夏号(高島屋社内向資料)  
(2011) \*高島屋百選会のインタビュー調査(座談会)に関する記事